

知床半島におけるエゾシカ保護管理計画策定の基本的考え方(案)

- 当面、人為的な土地利用と保全の状況に基づくゾーニングを行い、原則としてゾーンごとに個体数と生息地の管理目標を設定する。
- 将来は、エゾシカの個体数変動、生息地利用、季節移動、植生や生態系に与えている影響をもとに、より詳細な計画を策定する。
- ゾーニングは核心地域、緩衝地域、隣接地域(居住地域を含む)の3区分とする。
- 核心地域と緩衝地域では健全な生態系の保全、隣接地域(居住地域を含む)では農林業被害の防止と人間生活との軋轢の軽減、シカの持続的利用を管理目標とする。
- 知床岬のように既にデータがある地域については、先行して詳細な計画を策定する。
- 近代的な開拓が始まる前(明治以前)の生態系を、生態系回復の最終的なゴールとする。但し、我々が保全するのはある時点の状態ではなく、フィードバック機能のある生態系プロセスである。

ゾーンごとの考え方

ゾーン	現状に関する共通認識	管理目標	検討課題	調査・モニタリング	指標	回避すべき状態	シナリオ(案)	エンドポイントを達成する重要度・実現度
核心地域	<ul style="list-style-type: none"> ・エゾシカの大発生による海岸草原と越冬地を中心とした植生への悪影響が進行中 ・その他の植生タイプへの影響の詳細は不明 ・自然に放置した場合には、少なくとも過去100年間にはみられなかったような植生への悪影響が避けられない ・現在の大発生が自然生態的過程か人為的な影響による要因かを区別することは、現状ではできない 	<ul style="list-style-type: none"> ・生態系プロセスの保全 ・原則として人手を加えずに自然の推移に委ねることを基本とする。 ・但し、植物の種の地域的な絶滅回避と生物多様性の保全を前提とする 	<ul style="list-style-type: none"> ・核心地域で人手を加える場合の正当性の検討 ・植生タイプごとの影響を明らかにする ・植物の部分的な消失をどの程度認めるかの検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・柵の内外での植生変化の追跡 ・年輪解析、花粉分析などで時間スケールを検討する ・植物群落の絶滅リスク評価に基づく絶滅回避 ・植生への影響調査とモニタリング地点の設定 		<ul style="list-style-type: none"> ・植物の地域的絶滅 ・土壌の流出(エロージョン) 	<ul style="list-style-type: none"> ・放置 ・個体数調整 ・柵で囲う ・捕食者再導入 	
緩衝地域	<ul style="list-style-type: none"> ・離農跡地の森林再生が進行中 ・シカが最大の更新阻害要因となっている ・樹皮剥ぎによる樹木の枯死 ・植生への影響の詳細は不明 	<ul style="list-style-type: none"> ・人為的な影響の制御と自然環境の管理 ・森林再生による生態系の復元(開拓以前の自然を想定)ならびにシカの圧力の軽減 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然に放置した場合には、植生への影響は軽減されない。 ・人為的な個体数調整を行わないとする知床森林再生運動(斜里町)との整合性 ・植生タイプごとの影響を明らかにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・柵の内外での植生変化の追跡 ・植生への影響調査とモニタリング地点の設定 		<ul style="list-style-type: none"> ・土壌の流出(エロージョン) ・森林の更新阻害 	<ul style="list-style-type: none"> ・放置 ・個体数調整 ・柵で囲う ・捕食者再導入 	
隣接地域 (居住地域を含む)	<ul style="list-style-type: none"> ・シカの定着が進行中 	<ul style="list-style-type: none"> ・核心・緩衝地域の保全に資する管理を行う ・農林業被害の防止 ・持続的利用が可能なシカ個体群の維持 ・人間生活との軋轢防止 	<ul style="list-style-type: none"> ・可猟区の設定方針の検討 ・個体数調整による低密度化、生息地改変による季節移動の誘引 ・個体数調整の方針の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・個体数調整による適正密度の検証 ・個体数調整の効果の検証 ・住民の意識調査 		<ul style="list-style-type: none"> ・農林業被害・交通事故・人身事故をもたらすエゾシカの大発生 	<ul style="list-style-type: none"> ・放置 ・個体数調整 ・柵で囲う 	

1. 科学委員会からの要望

- ① エゾシカ増加の要因を洗い出す努力をして欲しい。
- ② 個体数管理を行うとすれば、シカをどの位の数と期間捕り続けなければならないのか。
- ③ 世界遺産地域の外の隣接地域で意識的に減少を図った場合、ある程度タイムスケールがあれば遺産地域内に効果が波及してこないか検討して欲しい。

2. シナリオ案に関連するエゾシカWGでの主要意見

実験としての個体数調整が必要

放置するだけでは、実験とならない。捕獲と放置の組み合わせ実験を行なう

シカを完全に排除する柵も現実の実験とはならない

- ① エゾシカの自然増加率はもともと高く、暖冬、捕食者の欠如、牧草地造成は増加を後押ししている。
- ② 国立公園隣接地域において、さまざまな水準の捕獲圧(手をつけない、徹底的にとる、中間)をかけて、シカと植生の相互をモニタリングする
- ③ 隣接地域の間引き効果を検証し、間引き体制のめどがたち、十分な合意形成が行なわれた段階で、緩衝地域・核心地域での個体数管理を検討する